目白大学　文学・言語学研究
第2号　2006年1月　29－35

マザー・テレサの政治哲学

――アイデアリズムの中のリアリズム――

石　井　貫太郎

目　次

1．はじめに――偉大なる母・マザー・テレサ
2．マザー・テレサのあゆみとその生涯
3．おわりに――マザー・テレサの政治的側面

1．はじめに――偉大なる母・マザー・テレサ

マザー・テレサは、1910年に現ユーゴスラビア領マケドニア地方に生まれたアルバニア人修道女である。1928年、自らの希望によってカトリック修道女となった彼女は、同年10月、アイルランドのダブリンにあるロレット修道院へ所属し、約1ヶ月の修練生としての生活を送った後に、やはり自ら希望してインドでの布教に従事した後、カルカッタのスラム街に住みながら、多くの学校、孤児院、ハンセン病患者の療養所を設立し、医療・福祉政策の先駆けとして、膨大な数の貧困者を救済した現代の偉人である。したがって、周知のように、このマザー・テレサという女性は、単に20世紀のみならず、人類史上に残る偉人の一人であるといえる。一政治学者にすぎない身をもって、このような巨人を論ずるという身のほど知らずの暴挙に対し、各方面からの批判があろうことは必定であり、また、当然の仕儀であろう。

しかし、マザー・テレサが行なった数々の偉大な仕事の背景には、世界中のいかなる政治家ですら見習うべき、彼女自身の現実主義的な感覚に基づく偉大な政治力が存在していたように思われる。というのは、マザー・テレサが示したような、あくまでも人間の尊厳を基調とし、物質よりも精神や魂の尊さを大切にする考え方が、ひとたび彼女自身の現実社会における活動へと適用される際、そこには、厳然としたリアリズムの観念に基づく政治的な力が作用していたからである。それは、人々の心に感動を及ぼすのみならず、その活動に自ら協力したくなるような他者の意識をも誘発させる。戦争や貧困の原因が国家ではなく人間にあるならば、それを少しでも解決するための人間的な努力をしていくしか道はない。そして、泣いても問題が解決しないのであれば、その対策を模索し、とにかく行動を起こしていく以外に方法はないのである。

マザー・テレサのこうした思想や行動に触れる時、われわれがそこに感傷的な意識を超えた感動的な衝撃を受けるのは、ひとえに、彼女の中にあるこうしたたくましいリアリズムに触れるからで

いしいかんたろう：人文学部地域文化学科助教授

あろう。叱った後に必ず励ましてくれ、誉めた後に必ず戒めてくれたマザー・テレサの数々の逸話は、彼女が文字通りの「母＝マザー」であったことを伝えている。そして、日本人であれば誰でも、それが日本の「おかあさん」や「おかみさん」の気質に通じる意識であることを感じるはずである。だとすれば、日本人の政治学者である筆者が、この偉大なるマザー・テレサのせめて一つの側面だけでも論ずる資格はあるのではないだろうか。

なお、マザー・テレサについては、いわゆる学術的およびジャーナリスティックな文字資料の記録だけでなく、膨大な映像記録も残されており、また、特に日本では、写真家の沖正弘氏の監修による『学習まんが人物館・マザー・テレサ』（小学館、1997年）などをはじめ、子供だけでなく大人にも読んで欲しいような内容の劇画や漫画も残されているので、それらの資料も参照しながら以下の記述を展開していきたいと思う。なお、事実関係については、三省堂編修所編『コンサイス世界人名事典（第3版）』（三省堂、1999年）とともに、近年の情報媒体として有用な「インターネット検索」によって発見した瀬尾哲也氏の手によるウェブサイト（http://www.kannet.ne.jp/trydent/index.html）の「マザー・テレサの生涯」などにしたがった。

2．マザー・テレサの生涯

(1) 修道女への道

マザー・テレサは1910年の8月26日に、現ユーゴスラビア領マケドニア州の首都・スコピア市のアルバニア人家庭（ボヤジュー家）に、三人姉妹の末娘として生まれた。幼名はアグネス・ゴンジャ・ボヤジューといい、両親は商人で一財を築いた熱心なカトリック教徒だった。彼女が5歳の時に初めてのコミュニオン（Communion：聖餐）を受けるが、9歳の時に父親が死亡し、以後、母親によって育てられた。子どもの頃より教会活動への参加に熱心で、若干12歳の時に、貧しい人々のために一生を捧げようと決心したと伝えられている。

(2) 運命の地・インドへ

1928年、18歳の時に、自身の希望により修道女への道を進みはじめ、アイルランドのダブリン市にあるロレット女子修道会に入会し、ここで約1ヶ月間の修練女として生活を送りながらアイルランドにおける布教に従事したが、その後、やはり自ら志願して、カトリックの修道女としてインドの西ベンガル州にあるダージリン市のロレット修道院に赴任する。そして、3年後の1931年、修道女としての初請願を立て、ここに彼女はシスター・テレサの修道名を得ることになった。

1929年から48年までは、ベンガル湾に面した商業都市であるカルカッタ東部のエンタリー市にあるロレット修道院付属マリア女学校の教師（後、3年間校長も勤める）として、主に歴史と地理を教える教職者となった。この時代は、1943年に数百万人の犠牲者を出したベンガル大飢饉が起こり、また、1946年にはヒンドゥー教徒とイスラム教徒の大暴動が勃発し、さらには、インド独立戦争とそれに続く印パ戦争などの激動の時代であった。こうした混乱期の中にあって、彼女は教師として

の日々の生活を送りながらも、常に貧しい人々のために何かしなければならないという思いを心の中に抱いていたという（インドの独立は1947年）。そして、1946年９月10日、黙想のためにダージリン市の修道院に向かう列車の中でいわゆる「神の召名」を受け、ついに修道会を出てスラム街に入ることを決意する。

当時、彼女のこうした突飛な希望には危惧の声もあったが、彼女が所属する修道会のマザー・ド・セクナル院長やヴァン・エクセン神父などの多数の助力者もおり、現地の大司教も彼らによって説得された。これ以後、シスター・テレサはイギリスの植民地から独立したばかりのインドで貧困救済の活動に入るのであるが、派遣伝道師としての身分の除籍をローマ法王に自ら申請するも、約２年間の審議のち、1948年８月、ローマ法王からカトリック修道女としての身分をそのままに（修道院を出ても修道女のままの身分で）街で活動する許可を得るに至る。

その後、短期間、インド東北部のパトナ市の病院で医療看護を学んだが、この時以来、有名な白地に青いラインの入った木綿の質素なサリーを身に付けるようになったといわれている。ちなみに、サリーの白地はキリストの母である聖母マリアを、青線は人間の純粋さを表し、この２つが一体となって神への奉仕がおこなわれるのである。

(3)　スラムの中へ

さて、いよいよ貧しい人々のために役立ちたいという念願がやっとの思いでかない、カルカタッタのスラム街での活動を開始はするが、当時の所持金はわずか５ルピー（約200円）しかなかった。しかし後年、当時を振り返った彼女は、「富の中から分かち合うのではなく、ないものを分かち合うのです」という言葉を残している。たとえいかなる苦難に遭遇しようとも、このまま引き下がる気など毛頭なかったのである。

そこでまず、学校にいくことができないスラム街の子供たちのために**「青空教室」**を開始した。こうした活動は、共通の文字や言語を習得することにより、種族やカーストにまつわる差別や較差をなくす試みとしての意義をも有していた。最初は５人であった生徒の数は次第に飛躍的な増加を見せ、現在、彼女が最初に作ったこの民間教育施設は、約120校以上もの学校で１万5000人以上の子供たちが学習する規模に至っている。また、スラム街の家庭を回ったり、病気のため道端で倒れている人々に手を差し伸べたりした。また、ほとんど助かる見込みのないない貧しい女性をカルカッタの病院に運び、その女性が亡くなるまで付き添っていた。このような献身的な活動から、彼女は「貧民街の聖者」と言われるようになっていった。そして、ちょうどこの頃、マリア女学校のかつての教え子の一人であったスバシニ・ダスがテレサの活動に合流している。後にマザーの最大のサポーターとなる後年のシスター・アグネスである。以後、イエス・キリストの12人の弟子にたとえられる12人のシスターたちが、彼女の仕事を献身的にサポートすることになっていった。

(4)　シスター・テレサからマザー・テレサへ

1950年10月７日、シスター・テレサはインドに帰化するとともに、かつての教え子たちであった

シスターとともに「**神の愛の宣教者の会**（Missionaries of Charity)」を独立の修道会として設立し、初代総長に就任する。ここに、シスター・テレサはマザー・テレサとなったのである。この修道会の誓いの戒律は、カトリック修道会に共通の「清貧であること、貞潔であること、従順であること」の3つに加えて、「貧しい人々の中でも最も貧しい人々に心から仕えること」の4つであった。

ちなみに、修道女たちの1日は、早朝4時半からの黙想（約1時間）に始まる。その後、5時半からのミサ・祈祷を経て、2班に分かれて掃除、洗濯、朝食の用意が行なわれるが、彼女たちの食事は、主食としてのチャパティと少量のおかず、そしてコップ1杯の水以外は何も口にせず、質素なものである。また、シスターたちには2枚のサリーと2枚の下着、そして、バケツ1個以外の私物はほとんどないといわれている。シスターたちが身にまとっている木綿のサリーには、修道女が着用するブルーのラインが入ったものと、見習いの修練女たちが着用するラインの入っていないものがあり、この修練女たちには6ヶ月の見習い期間の後に2年間の修行が課せられ、さらに5年間、毎年の誓いを立ててはじめて正式なメンバーとして一人前のシスターとなることができる。また、最後に行なわれる終生請願式は、今もベンガル地方の結婚式行事に乗っ取った方法で行なわれている。

朝食後の7時半、すぐに街中の各施設や路上へ出て救済活動が開始される。この活動は過酷な労働であり、長時間奉仕に従事するための忍耐力と強い意志、そして、強靭な体力が求められる。かつて売名をあて込んだアメリカの屈強な男性上院議員の一人が、たった2時間ほど手伝っただけで脱水状態になって倒れてしまい、病院へ運ばれるという本末転倒な情けないエピソードがあるほどである。また、シスターたちを手伝うボランティアの主婦たちは、路上生活者のために毎日約7000人分の食事を作るが、その食事や世界中から集められた救済物資（医薬品・衣料品など）を実際に配給するのはあくまでもシスター（修道女）やブラザー（修道士）の役目である。また、シスターたちはいずれも2人一組になって行動するが、昼休みをはさんで夕方まで活動し、夕食、黙想、ミサを経て、夜9時に消灯する。

(5) 尊厳死への挑戦

1952年、路上で死にかかっている人を連れてきて、最後を看取るための施設「**死を待つ人々の家：ベンガル語で“汚れなき心”の意**」をヒンズー教のカーリー寺院に開設する。いうまでもなく当時、地元のヒンズー教徒の住民はこれを快く思わず、強い反対世論と施設撤去を求める請願活動が展開されるが、コレラで死にそうなヒンズー教徒の僧侶を引き取ってその死を看取ったことをきっかけに住民の彼女を見る目が変わり、多くの地元の協力者もあらわれ始めた。この施設では、まず、入院者に対して名前と宗教が聞かれ、これによって人権と信教が尊重され、本人が信仰する宗教に応じた埋葬が行なわれるしくみになっている。「恵まれない人々にとって必要なのは多くの場合、金や物ではありません。世の中で誰かに必要とされているという意識なのです。見捨てられて死を待つだけの人々に対し、自分のことを気にかけてくれた人間もいたと実感させることこそが、愛を教

えることなのです。」この言葉どおり、マザー・テレサの修道会は彼らに手厚い看護を施し、すべての人が人間としての尊厳を持って息を引き取れるように尽くし続けた。

(6) 孤児救済とハンセン病患者医療

1954年、入会者も28名となった当時、「マザー・ハウス」と呼ばれる新しい建物に本部を移動する。そして、翌55年、住民が譲ってくれた家を孤児のための施設**「聖なる子どもの家」**として開設し、ここで捨て子や身寄りのない子どもたち1万人以上を育てた。彼ら孤児たちの多くは、インド国内だけではなく、アメリカやヨーロッパの里親へ養子として引き取られていった。

また、栄養失調からくるハンセン病や結核は不治の病と恐れられ、当時、インド国内だけでも約10万人と言われた患者たちが存在していた。彼らは仕事も失い、また、家族からも見捨てられていた。マザー・テレサはこうした現状を憂い、移動診療車を使って農村での診察を開始するとともに、このハンセン病や結核の治療も開始した。患者のための募金活動も精力的に展開し、一般の人々や市民団体、地方自治体などの協力を獲得した。1968年には、西ベンガル州知事からハンセン病患者の施設を作るための14万平方メートルの土地を譲り受け、患者のためのコミューンとして「平和の村」を作る。この時、ローマ法王からおくられた10万ルピー（約300万円）の高級オープンカーを賞品にした宝くじを考案して発売し、その莫大な建設費用を捻出したという伝説は有名である。また、ココナッツの実の繊維からマットやタワシをつくり、施設内で使用するほか、商品として街で販売するようにし、さらに、インド航空に交渉して余剰機内食を「聖なる子どもの家」にもらえるようにした。

(7) 活動の国際化と世界中からの賞賛

1960年代になると、マザー・テレサはシスターたちをインド各地をはじめ、国外にも派遣するようになり、65年には、インド以外でのはじめての「神の愛の宣教者会」の施設をベネズエラに開設する。続いて、同様の施設をローマをはじめとするヨーロッパ、アメリカ、アフリカ、そして、オーストラリアなどにも開設する。今日では、6000人以上の人々がこの活動に参加し、国家の体制に関係なく、実に130カ国にまたがる600以上の団体にその輪が広がっている。

こうしたマザー・テレサの活動は、その遂行の過程で数々の表彰を受けた。まず、1962年のインド政府からの**パドマシュリ（Padmashri）賞**をはじめとして、1971年にはヨハネ23世から**世界平和賞**を授与された。また、その翌年にはやはりインド政府から**ネルー賞**を受賞した。さらに、1979年、選考委員会の満場一致で**ノーベル平和賞**を受賞するが、この時、「私個人は受賞に値するほどの者ではありませんが、世界の最も貧しい人々の名においてこの賞を受けましょう」との名言を残している。また、ノーベル賞委員会主催の受賞パーティーも、インド政府主催の受賞パーティーも、「そのような余裕があれば貧しい人々に寄付をしていただきたい」とだけ言い残してあっさりとキャンセルし、さっさと平素の生活に戻っている。そして、これ以後も、マザー・テレサの活動は果てしなく続いていく。

1975年、学校施設と病院に加えて、限定的な作業能力を持つ心身障害者のための複合センター「**プレム・ダム（愛の贈り物の意）**」を開設する。そして、1981年の4月に初来日して以来、続く82年、84年と前後3回の来日を果たし、いずれも各地で日本国民の熱狂的な歓迎を受けて講演し、「日本人は物質的な豊かさを実現しましたが、まだまだ精神的な豊かさが欠乏しています」とわが国民に警鐘を鳴らした。また、1982年8月、イスラエルの攻撃を受けたＰＬＯ（パレスチナ解放機構）がこれに報復反撃し、中東地域で紛争が勃発した際には、国際赤十字と協力しつつ、戦場となったレバノン北部ジェニエ港に取り残された37人の子供たちを救出するなど、平和への積極的な活動も展開した。

(8) 偉大なる足跡の終焉

しかし、1983年、病気のためローマで倒れ、自らローマ法王に修道会総長の引退を申し入れるが、修道会のシスターたちはこれを良しとせず、引き続き行なわれた総長選挙において満場一致でマザー・テレサを総長に再選出した。永きに渡る厳しい修道女としての生活は、彼女の身体に20年以上にも渡って心臓病を患わせていた。その後、数回の発作に襲われたのち、なおもペースメーカーを用いて活動を続けるようになったが、病状の悪化に伴い、1997年、ついに総長を引退した。その後、ヨハネ・パウロ2世との面談の後、カルカッタに戻り、最後の数週間を過ごした。そして、同年9月、「もう息が出来ないわ」との言葉を残し、心臓発作のため87歳の天寿をまっとうした。国葬が行われ、1万4千人もの人々が世界各地から集まり、この偉大な女性の死を悼んだ。残された仕事は、新総長のシスター・ニルマラたちが受け継いだ。

3．おわりに――人類の偉大な遺産・マザー・テレサ

2003年10月、サン・ピエトロ広場で、ローマ法王ヨハネ・パウロ2世が主催した列福式において、マザー・テレサは聖人の前段階である「福音者」に列せられ、その参列者は30万人を超えた。また、翌2004年6月、はじめてわが国にマザー・テレサの活動を紹介したカメラマンの沖正弘氏の写真展が、バルセロナのサグラダ・ファミリア教会（ガウディ設計の建築物として有名）で開催された。その入り口には、数メートル四方にもおよぶマザー・テレサの巨大な微笑みの写真が掲げられ、その下には、「Works of Love are Works of Peace（愛の技は平和の技）」の文字が誇らしく記されていた。

ちなみに、マザー・テレサの活動については、世界の貧困者をすべて救うことができない以上、その活動に果たして意味があるのかという問いかけがなされる場合がある。要するに、焼け石に水だということであろう。しかし、1982年に来日してＮＨＫの番組に出演した際に、彼女は静かに、そしておもむろにこう語っている。「私たちの仕事は、社会変革を目的としてはいません。確かに私たちの仕事は大海の一滴にすぎないかも知れませんが、しかし、一敵の水なしには大海は成り立たないでしょう」と。そして、「私たちの活動が経済的に苦労したことなど一度もありません。必

要なものは、すべてだれかが寄付をしてくれたり、だれかの手を通じて自然に私たちのところへやってきてくれます。この自然の摂理こそ、神の摂理なのです」と。

マザー・テレサについて、これ以上の多くを論ずる勇気と技量は、筆者にはない。20世紀の人類が生んだ最も偉大で誇りとするべき人物こそ、マザー・テレサその人であったといえる。彼女の偉大な社会活動の一つであった「死を待つ人々の家」のマリア像の首には、インド政府から贈られた最高位の勲章が無造作に掛けられている。マザー・テレサ自身には、勲章など不要である。なぜなら、彼女のような人間がこの世界に生を受け、語り、そして生きぬいた事実そのものが、われわれ人類の勲章だからである。

注　釈

(1) マザー・テレサ（Mother Teresa：本名 Gonxha Bojaxhu）（1910年～1997年）
ローマ教会・カトリック修道女・宣教師（洗礼名 Agnes）

マザー・テレサに関する日本語（訳書を含む）の体系的な伝記は意外に少ないが、代表的な文献として、シャルロット・グレイ（橘高弓枝訳）『マザー・テレサ』（偕成社）、和田町子『マザー・テレサ』（清水書院）、ナヴィン・チャウラ（三代川律子訳）『マザー・テレサ：愛の軌跡』（日本教文社）などがある。これは、マザーの活動がきわめて実務的であったが故に、新聞、テレビなどのメディアを通じてその情報が伝えられる傾向が強かったことに起因すると思われる。

(2) マザー・テレサの存在とその偉業をいち早く日本へ紹介したのは、在日カトリック教会関係者と写真家の沖守弘氏をはじめとするジャーナリストたちであった。たとえば、沖守弘『マザー・テレサ：あふれる愛』（講談社文庫）、沖守弘『マザー・テレサと姉妹たち』（女史パウロ会）、沖守弘『マザー・テレサ：愛はかぎりなく』（小学館）などを参照せよ。